

## 檀那波羅蜜

### 布施

そこで、先づ第一は檀那波羅蜜、即ち布施であります。布施という言葉は、普く平等に施すという意味であります。僧侶に対してお金を贈る時、包紙の上に布施と書きますが、あながちに、僧侶にものを贈る場合にのみ用うべき言葉ではなくて、一切に恵み施すことを布施するといふのであります。一体我等の生活を仏教では、自利と利他とに分類致しますが、真実に自利する、即ち自分を利する道は、そのまま利他、他の一切衆生の利益となることである。一切衆生の利益、即ち利他はそのまま真実の自利と一致する。自利利他一如であることを主張します。そこでこの自利利他の上から六度を見れば、

布施……………利他

持戒

一、菩薩行

忍辱

精進……………自利

禪定

智慧

ということになります。ですから我等の世界、一切衆生、家庭、社会、国家に於ける我等の生活は、一言にして布施という一徳目によつて解決せらるべきであります。即ち我等の世界は、布施によつて美しく成就さるべきことを説かれたものであります。若し布施が成就する社会、国家、家族は安穩であり、幸福であります。布施の成就されない世界は暗黒であり不幸であります。

大乘義章十一に、

「己が財事をもつて、分つて他に布与するを布といひ、己をやめて人を恵むこれを目して施という。」

己をやめて人を恵むということは一、内に信心あり、二、外に福田あり、三、財物あること、この三事合する時、心に捨法を生じて、よく慳貪を破するを布施といふ。といわれますように、慳貪邪見、無信、不徳にして成就されることではありません。唯、無我の慈悲からのみ生まれて来ることであります。人間は時に、片手を動かすことも大儀である。十銭恵むことも嫌である。山ほど宝を積んでいても、それを施すことが出来ない。けれども又、その同じ人が、何でもほしくない千万金をなげ出すこともあれば、単に物資のみならず、我が身体生命すら捧げてゆくことすらあります。それは全くその心境、信境の如何によるのであります。その同一人にして、十銭出すのが大儀であったり、命をも献じて行つたりする。そうした善不善は何によつておこるのであるか。ここに大問題がひそんでいますから、布施のつぎに、更に次第に五つの世界が出て来るのであつて、その最後に智慧が説かれてある所以であります。

智慧に生きるとは、信心に生きることでありますが、信心即ち如来の大慈悲に生きて働くならば、生活全体が一大布施行であることがわかつて来ます。道元禪師の修証義には、

「その布施というは貪らざるなり。わがものに非ざれども、布施を障えざる道理なり。その物の軽きを嫌わず、その功の実なるべきなり。然れば則ち一句一偈の法をも布施すべし。此生他生の善種となる。一銭一草の財をも布施すべし。此生他生の善根をきざす。法も財なるべし。財も法なるべし。但彼が報謝を貪らず、自らが力を領つなり。船をおき、橋を渡すも布施の檀度なり。治世産業固より布施に非ざることなし。」

とありますが、誠に布施の易行であることを訓えられ、生活即ち布施であることを示されてあります。実に一度、仏の大慈悲の鉄槌によつて、報恩の大行に生まれ来れば治世産業固より布施に非ざるなしで、万金必ずしも多からず、一銭一草時に軽からず、一挙手一投足にも意味を感じることが出来ます。「布施というは貪らざるなり」とは実に千古の名断であります。貪欲の心には、唯に布施が成就されないのみならず、一切の善は影をひそめます。貪欲を超えることこそまことに私の生活をして、菩薩の布施行たらしめる唯一の方途であります。

### 三品の布施

大智度論には、布施の三品が説いてあります。

財施……………物質を施すこと

法施……………法を施すこと、即ち精神的な布施

無畏施……………畏れること無きを施す。畏れをとり去つて安心を与えること

以上のうち財施とは、物質を布施すること、我等の世界は、有無相通じ、互いに2恵まれて、毎月の月給は三百円、ボーナスは千円、その下で働く者は、一日一円、ボーナスなし。こんな布施のあまりに差別的になされてある世界は平和ではありません。そしてあり余る者が少しも布施する心がない。いよいよ「布施というは貪らざるなり」との道元禪師のお言葉に反したことをやっている、この世が面白くないばかりか、その人自身は、人生の有り難さも、道義の尊いことも自覚せず、やがては、三塗八難に沈むべきものであります。

物質に恵まれた者は、なるべく自己の生活は質素にして、その恵まれた福德を、多くの人々に分かつべきであります。報謝すべきであります。

積尊の慈訓に随えば、布施する者も合掌すべきであり、布施さるるものも亦合掌すべきであります。金を出して物質をいただき、物質を頂いて金を差し上げる。我等は布施する以前に日々の生活に於いて布施されていることを思えば「報謝を貪らず、自らが力を領つ」べきであります。布施の大精神なき人の集まれる社会には、遂に平和はありません。考うべきであります。富んで布施なきが如きは誠に社会国家の仇敵といふべきであります。獅子心中の虫であります。

### 布施

布施の第一は、財施であります。財物を人に施すことでもあります。人間は一面精神的存在であると共に、一面肉体を持っています。そこで衣食住の問題がおきて来ます。

衣食住は物質の問題をおこします。積尊は十悪の一つに貪欲を挙げられました。貪欲とは、物質に対する間違つた生活態度のことです。布施はこの貪欲の心からは生まれて来ませぬ。貪欲であることは、それ自体、布施行を裏切るものであります。ですから道元禪師は、

「布施というは貪らざるなり。」

と示されたのであります。元來物質は、一人の手に奪わるべきではありません。万人平等に恵まらるべきであります。積尊の理想の如く、社会全体にこの「布施」が成就された時、人生は美しい楽土になるであります。持つ者も、持たぬ者も、いよいよ貪欲である時、人生は地獄になるべきであります。しかしこの財施だけでは、布施はまだはつきり致しません。つぎに法施について考えてゆきます。

## 法施

法施とは、読んで字の如く、法を施すことであります。精神的な布施であります。積尊は何時も巷を行乞して、財施を衆生から受けられました。そして衆生には、法を施されました。即ち法施に生きられたのであります。仏教とは積尊の法施が集成せられたものであります。

正しい真理——即ち法が、教となつて一切衆生に恵まれてゆく。そこに人間の世界に、他の動物の世界と違つて社会文化が成就されるのであります。

唯に積尊の仏教をお説きになることが布施であるばかりでなく、教師が教壇上に生徒を教えることから、道に困つた人に道を教えてあげることも、悩む人に親切な言葉一つかけることも、間違いを忠告することも、一切皆、法施であります。精神的な布施の全てが法施であります。私どもは、物質を布施し、布施されているばかりでなく、それよりもっと多く、毎日毎日をこの精神的なもののやりとりによつて生きています。

一人の人間が生まれて来て、この法施を受けなければ、猿とあまり大差はないかも知れません。然るに、過去幾千万年の間かかつて成就された文化を唯教育によつて授けられ、短い間に消化して、一人前の人間になるのであります。電車に乗ることは易い。しかしその過去には、これを発明するために全精神をなげ出して、精神的布施に生きてくれた科学者があつたはずであります。一真理も、それを学ぶのは易い。しかし唯一つの法則も時に、天才の一生を費やしています。エジソンによつてなされた驚くべき発明の法施は、全世界に満ち満ちています。精神能力の布施によつて我等の社会国家は成立してゆくのであります。

しかし法施は決して大聖や、天才でなければ出来ないというのではありません。「二句一偈の法をも布施すべし。」お祖父さんの何時もの口癖の一言が孫の一生を生かしたり、行詰まつた夫に与える妻のたつた一言の激励や慰めが、再び夫を更生せしめたり、一切万人に法施は出来るのであります。我等は心を持っています。そして口をもっています。先ず能う限りのこの法施を実行すべきであります。

釈尊御入滅の時であります。二月十五日仏は拘尸那城、阿夷羅跋提河の畔なる娑羅双樹の間に涅槃の座をおとりになりました。その時、大比丘衆八十億百千人が前後を圍繞していました。それから比丘尼、菩薩、諸天善神をはじめ、いわゆる五十二衆が、それぞれ無数の眷族をつれて、この聖座に集まります。そしてそれら、み仏に最後の供養をお受け下さるようをお願いするが許されません。その聖会はさながら三千大千世界総がかりの様子です。その時最後、拘尸那城の工巧の子で純陀とよばれる男が十五人の同類と一緒に参ります。そして合掌し悲感流涙して仏に申します。

「唯願わくば、世尊及び比丘僧、哀れみて我等が最後の供養を受け給え。

……………」

とみ仏の御威徳を讃えつつ、ひたすらに救いを求め、供養を受け給わんことを求めます。その時世尊は

「善哉善哉、我今汝がために貧窮を除断し、無上の法爾を汝が身田に雨して法芽を生ぜしめん。」

とて遂にその願いを許し、仏最後の供養をお受けになるのであります。その時無量の衆は「善哉善哉、希有なり純陀……………」 仏の涅槃に臨み最後の供養し、能く此の事を弁ずるは復此（仏の出世、及び仏に値いて信を生じ、法を聞くこと）よりも難し。南無純陀南無純陀、汝今すでに壇波羅密（布施）を具す。猶し秋月十五の夜、清浄円満にして諸の雲翳なく、一切衆生瞻仰せざること無きが如し。汝も亦是の如く我等に瞻仰せらる。仏すでに汝が最後の供養を受けて汝をして壇波羅密（布施）を具せしむ……………南無純陀、人身を受くといえども心仏心の如し。汝今純陀、真4に是仏子羅ゴ羅の如く、等しうして異なることあることなし。」

十二月報恩講の時、この純陀品を講じて、大きなものを得さして頂きました。純陀は微供といっています。僅微なものを供養したのであります。しかしその精神的意義は絶大であります。即ち財施と共に彼は、仏になる道を成就したのであり、釈尊は、財施を通して、布施する者に、尊い法施として、純陀をして、五果、即ち、無量寿の生命——常命、亡ぶことなき法身——常色、窮盡ことなき力——常力、変わることなき安樂——常安樂と、常無碍弁才の五果を施されるのであります。

#### 法施即財施、財施即法施

ここに我等は、法施は財施によりて成就し、財施は法施によりて意義を持つことを知らされました。単なる財施は意味を持ちません。例の長者の万燈、貧女の一燈においても、王の万燈は何故に消え、貧女の一燈は何故に不滅であり、未来、須彌燈光如来たるべき記別が与えられたのでありましようか。全く一燈の裏に盛られた精神的意味であります。即ちその衷心に大信合掌がある時にはじめて布施は布施たり得るのです。これをもつとはつきりいえば、仏、法、僧の三宝に対する帰依の信こそ、布施の根底に横たわるべきなくてはならぬものであります。

ここに於いて再び想起するのは、道元禪師のお言葉であります。

「法も財なるべし。財も法なるべし。」

のお言葉であります。法施がやがて財施となり、財施がやがて法施となる。

電気の発見、発明のためになされた精神的努力は、世界をして夜を不夜城に変えた。人類に対する法施はそのまま財施でありました。私どもは施すべき何物をも持たない場合でも、法施だけは可能であります。貧しきが故に人生を悲観している人が、一切を負うて立ち上がる力を与えられて、今では幸福な世界を築いている人があります。京都の蛇ヶ谷で、陶器の芸術家としていわゆる、無塰焼むへいやくをつくっている迦洞無塰氏かどうむへいの実弟加藤博氏は先日私の所で語られました。無塰氏のお家は菓子屋です。朝鮮で菓子を作る考えで、むこうに渡り丸裸になつてかえり、広島あひがなすの法性寺で暁鳥さんのお話を聞かれ、それがもとで、遂に陶器を志し、発奮努力して今日があるのだそうです。又財施がそのまま法施とはどんなことか。自分に財産はあつても智も法もない。しかし金を出して幾多の青年を教育している方があります。その教育された人が、社会指導の位置に立つ、財施が法施になつたのです。聖者を供養する場合も、財施がやがて聖者を通して、人生に法施をしたことになります。

人生のあらゆる文化の成就のために、書齋にこもり、アトリエに働き、研究室に立つてもつている方々やら、俳聖芭蕉のような方、良寛様のような方、ロダンやその他、直接生産には働かないでも、尊い文化の華として生きているあらゆる方にも物質は布施さるべきであります。そうしてかかる人は人生に尊き法施をなすべきであります。ただ心がけねばならぬことは、道元禅師の

「但、彼が報謝を貪らず、自らが力を頌つなり。」

のみ言葉であります。報謝をば貪り、自らが力を頌つことをおしむ時、布施の徳は失われて、お互いの世界を、偷盜ちゆうとうの黒繩こくじょう地獄にします。

若し仏のみに合して為されるならば、

「船をおき橋を渡すも布施の壇度なり。治世産業固より布施に非ざることなし。」

で、百姓することも、商売することも、会社に、役所に働くことも、一切が生活即ち布施となるべきであります。

### 無畏施

大智度論の三種の布施について申しあげて来ました。三種の布施とは、

#### 財施

#### 法施

#### 無畏施

のことでありました。以上のうち、財施と法施については大体申し上げてきましたから、無畏施について申し上げます。

無畏施とは「恐れ無きを施す」ということであります。他人が畏怖をいだいているのを取り除いて安心を与えてやることであります。法施や、財施が成立するのにも、その根本には、この無畏施が横たわつていなければなりません。何となれば、他の畏怖に対して働く心は慈悲であります。慈悲なればこそその不安心を除いてやりたいと思うのであります。全て大慈悲が根底でなければ、真実だとは言われません。

他人の危難を救うのには、精進の勇がなくてはなりません。そして又、自らは時に苦をも忍受しなくてはなりません。時には、自己の生命すら捧げてかからなくてはな

りません。かかる精進も忍従もそれはただ大慈悲よりおこることです。大慈悲は仏心であります。仏の大慈悲を表象するものは、観音菩薩であります。観音様のことを施無畏者とよぶのは、誠に当然のことです。我等は先ず如来に救われて、仏の心として生くべきであります。

かの一身の安危を忘れて、濁流に身を沈めて教え子を救おうとした殉職教師が世人の尊敬を得たのは当然であります。財施により、法施により、あるいは全身を賭して利他に生きることが人類の尊い使命であることを自覚しなければなりません。

### 八種の布施

俱舍論には八種の布施が説いてあります。布施は布施でも、その心に何があつたかは、当然批判さるべきであります。俱舍論の説はその批判であります。八種とは、第一、隨至施、第二、怖畏施、第三、報恩施、第四、求報施、第五、宿先施、第六、希天施、第七、要名施、第八、為莊嚴心、為資助心、為資瑜伽、為得上義の施。（心を莊嚴せんがため、心を資助せんが為、瑜伽に資せんが為、上義を得んがための施）。以上の八種の施についてお話しします。

第一、隨至施、至るに隨つて施すということ、自分に近づき至るに隨つて布施するので、嫌々ながらする布施であつて、真実のものではありません。善とは全て自由意志によつて生まれたものに限られます。

第二、怖畏施、災厄を怖れて施すことで、不徳の富を得た者が罪をおそれたり、施さないと後の祟りが恐ろしかったり、あるいは又、財産が壊れてゆくのを見て、施し6て失うまいとする心からする等、怖畏が出発の布施である。何と今の時代には、これを求める者、この布施をする高官富豪の多いことでしょう。もちろん問題になりません。

第三、報恩施、過去に受けた御恩を報ずるための布施であつて、尊いことではありません。

第四、求報施、今施しておいて後の返報を求める心からする布施である。施して、表彰、名誉、幸福、利益を求めるので汚れた行為であります。

第五、宿先施、先人父祖の教法に習つて恵施したり、先例によつてするので、悪でもないかわりに善でもありません。

第六、希天施、布施の徳によつて、死後天上界に生まれようとするのであります。天理教が日の寄進とて、一人前以上の善をすれば、天の記録にとどめられ、来世の幸福を与えられると信じます。功利的な、因果に囚われた善であります。

第七、要名施、美名を得んがために布施するので毒善であります。

第八、1. 心を莊嚴する為。布施によつて我自身の徳を成就するための布施、

2. 心を資助する為、心をたすけて、迷いの世界を遠ざからんがための布施、

3. 瑜伽に資するが為、瑜伽とは禪定のこと、心寂定の境に住して、乱れぬことのため、

4. 上義を得る為、上とは涅槃のこと、即ち涅槃のさとりを得ることのため。

以上第八の布施は、全く智慧から生まれた、第一義的な布施であります。その根本精神は布施することによって、布施すること自体を喜びとする布施であります。

法施にせよ、財施にせよ、それはそのなされた量よりも質が問題であります。一木一草の中にも自己の全身全霊が打ち込まれてある時は尊いことでもあります。全身全霊を打ち込んだ生活自体が尊い布施でありますから、我等は先ず、如来の大慈悲に目覚め、智慧光によって我執を否定されて、生活即ち布施を成就しなくてはなりません。

## 無財

布施について続いてお話し致して来ましたが、布施の生活こそ美しい人生を創造してゆく尊い道であることを重ね重ね申して来ましたが、しかしここに問題があります。それは布施と言え、何だか富める者が貧しき者にする道のように考えられることでもあります。しかし釈尊の真意はそうでありましょうか。

そこで雑宝蔵經にあらわれた釈尊のみ教であります。ある時、一人のお弟子がお問い致しました。「私どもはみ仏の教の如く、善いことをしようと思いますが、私どもは貧しくて、少しの蓄えもない上に、貧しいがために時間を持ちません。世間の長者の如く、金と時間のない我等には、善を修めることは困難であると存じます。」

「金はなくとも、時間はなくとも、容易に出来る布施がある。それについて説くであろう。」とてお説きになったのが、有名な「無財の七施」であります。

金がない、時がない。我等はよくこれによって無善の自己を弁疏しますが、真実の善は、ありあまる金と、生活の暇を持つ人でないと出来ないとするれば、貧しい者は、7道から、善から拒まれているとしなくてはなりません。しかし真実道は如何なる人にも行持されなくてはなりません。以下無財の七施について述べてゆきます。

## 眼施

第一は眼施であります。

眼施とは眼をほどこすことであります。それはどういう意味でありましょうか。「仏造つて眼まなこを入れず」とか「眼がものをいう」とか「画竜点睛」とか言つて、眼は人格の象徴とされ、時には生命の表象とされてあります。眼が生きておると言え、心が生きておることであり、あの男は盗人眼をしておると言え、おそろべきものとされ、慈眼と言え、観音菩薩を想起します。

我等は時間と財とに関係なく、起きている間は、この眼を万物の上になげかけています。何よりも先ず人の上にこの眼を与えています。ですから、眼の生活、眼の善、眼の悪、眼の徳はそのまま人格そのものなわけではありません。すまいか。

瞋恚の恐ろしい眼、淋しい暗い愚痴の眼、悪魔のような貪欲の眼、浅ましい嫉ねたみの眼、高慢な人を軽蔑した眼、卑しい媚びる眼、冷たい裁きの眼、世をすねた白い眼、のぼせ上がった赤い眼、悪らしい威嚇いかくの眼、厚かましい皮肉な眼、陰鬱な恨みの眼、等々が人に与えられる時、その眼の光が相手の心を乱します。

でありますから、先ず眼の生活から成就しなくてはなりません。だが眼だけを美しくすることは出来ません。眼を美しくしようと思えば、その心から、その生活から善

くならなければなりません。そこに宗教生活がなくてはなりません。凡そ世の中に私どもほど、美しい眼を拝むことの多いものはあるまいと存じます。正法を聞き、仏を拝み、心に懺悔と感謝とのあふれた方々の眼ほど世に尊いものはありません。

喜びに輝く眼、慈愛にうるむ眼、邪心のない清浄の眼、金剛の信力そのもののような權威ある眼、柔和な眼、等はそのままだが尊い布施であります。あるいは時に千万金よりも尊いものとなって人の上に生きるでありましょう。

## 和顔施

第二は和顔施わげんせであります。

和顔とは「やさしいかんばせ」であります。顔は心そのものの象徴であります。あまりはつきり見わけのつかない手足や体は包みかくしてありますが、喜怒哀楽、心のまに少しも隠すことなき顔だけは何時も現れています。心が卑しければ顔も卑しく、心悲しければ顔も悲しい。お恥ずかしいことであります。我等は心そのままの顔を平気で人の前にさらしています。鋭い反省が顔の上になさるべきであります。鏡を見て、唯肉体の美を見ようとします。けれどもそれよりも先ず、鏡に写る自己の上に心を見るべきであります。鬼面そつくりの顔、幽霊のような顔、高慢な顔、呪いに満ちた顔、厚かましい千枚張り等々がどれだけ家を暗くし、人を傷つけることでありましょう。

美しい顔、低い鼻が高くもなりませんし、黒い顔が白くもなりません。しかしそれらとは全く別な世界での美人になら誰でもなられます。和顔わげんせはそれがそのままで、一切群生に捧げらるべき尊い布施であります。

## 言辞施

第三は言辞施げんじせであります。

大無量寿経には「和顔愛語」とあります。愛語とは慈悲のこもった言葉であります。言葉を使うことは人間にのみ許された特権であります。私どもの意志表示は唯言語によるのでありますから、当然この言葉の上に厳しい反省がなされなくてはなりません。忠とは口と心とを一本の釘で貫かした文字で、心と言葉の相違しないこと。誠とは、言成るで、言葉と行為の違わぬことであります。されば釈尊は、口に四悪をあげて誡められました。偽りのならべられた妄語、表を飾った綺語、人の悪を裁く悪口、人と時とによつて違つた両舌、この妄語、綺語、悪口、両舌が我等の社会を混乱に陥れ、暗黒にし、悲惨にしてしまうのであります。

語られる言葉に、真理まことが摂おさめられており、慈悲がただよつており、親切がみなぎつており、朗らかさが輝いており、上品さがあり、誠がこもつておる時、それ自身が尊い布施であるとの聖訓であります。時に堂々たる男性が、傾城けいせい女にょ郎の舌三寸に身をあやまり、時に良師の一言が子弟の一生を大成せしめます。言葉ほど尊くもあり、危険であるものはありません。誠に活殺自在であります。我等の舌は何をでも言うことが出来るように出来ています。資本もいらす、骨も折れない言葉でありますから、美しい言葉を布施したいものであります。悪い言葉、冷たい言葉のみ多く流れる家庭は



決して明るい世界にはなりません。美しい言葉の布施が出来るとはならないかとの聖訓は誠に有難く頂けます。南無阿彌陀仏は言葉の中でも一番尊いものでなくてはなりません。

## 身施

第四は身施しんせであります。

身施とは身を施すことあります。身そのものの働きの布施となるのであります。何も施すものがない貧しい者に渡された一つのものであります。

体を働かせることが布施であるとは、有難いことあります。世には自分の体で出来ることでもきめつけて人にやらせる人があります。又自分がなくてはならぬことでも平気で見のがします。

汽車の中で一寸手をかして老人の荷物を下ろしてあげること、坂の車に手をかしてあげる、箒をとって掃除する、私どもの手を待っているものは至る処にあります。

更にもっと深く考える時、日常のそれぞれの仕事に、自分の全体を打ち込んでゆく、そこにのみほんとの人生の喜びがわいて来ます。人が生きてゆくのに、必要なのは金だ。だから誰がしていることも金のために動いているのだ。と言ってしまふ人があります。だから誰がしていることも金のために動いているのだ。と言ってしまふ人があります。それは人間の心の尊い部分を全部、泥の中に捨てた言い分であります。自分の全身を捧げて生きる者にだつて物質のいることはもちろんですが、だからと言って何時でも物のためにのみ動くものではありません。物のためになされたこと死んだ生活の面白くないことはもちろんであります。ほんとの喜びは、全身全霊を打ち込んでやれることを為している時より外にはありません。

貧しい者は、生きること命がけです。病むことも、人のためにすることも何もかも命がけです。随つて宗教や、社会のために働く時にも命がけです。身施は貧しい人に成就されやすいのかも知れません。

他人の前で勝手ばかりする。礼儀を守らない。便所を何時も汚して平気、下駄一足揃えない。こうした人は必ず何時か人に厄介やっかい視されます。されば身施は、礼儀を守ること、身勝手をしないこと、放縦にならないことから行わるべきであります。

## 心施

第五は心施しんせであります。

心施とは、心を施すことあります。何を施しても最後に心がこもっていないければ真実ではありません。しかし何はなくとも、慈悲に輝き、愛のこもった心を与えられた時、人はこの愛の心に生かされます。これは最も大切なことあります。美しい温かい心の布施、これこそ我等によつて成就されねばならぬ何よりの易行でありつつも、成就されていません。温かい心の布施が時には、人の一生を支配します。心すべきであります。愛の心は人格の本質であります。

## 牀坐施

第六は牀坐施しょうざせであります。

牀坐施とは、坐る所を施すことであります。

ある時急行列車はひどくこんでおりました。ところが私の横に、若い奥さんが、白い毛布を敷いてその上に坐っています。こういう装置をしますと人間は、ここが当然自分のものだという根性をおこします。その前には五十位の婦人がいます。子守ともとれますし、お姑のようでもあります。

もちろん奥さんは赤ちゃんをつけています。果物籠やら、雑誌やらが一ぱい置きちらしてあります。そこへ一人の六十位の老婆が沢山な荷物をもつてはいって来て、ここに坐らして下さいと求めました。ところが若い奥様は、鋭い眼をして「不埒者奴が！」と云わぬばかりです。子守らしい婦人は、私は子供のお守りをしますののでと言つて、坐を頒わかちません。所がその老女もなかなかまけてはいません、お子供様は奥様の横があいているではありませんかと言つて、とうとう坐つてしまいました。敵もさるものでお弁当を使いはじめましたが、席の七割もとつて、大きなお臀をこちらにむけて、ますます坐らすまいとします。老女は、籠や雑誌があつてもかまわず、はせこんで坐ろうとします。ここに醜い争闘がおこりました。女と女との間は、男子の間よりも、もつとこうした争いが多いようであります。席の上のものを全部棚にあげて、どうぞと座を頒つこと、出来そうなことですが、心に大蛇が動いている時は難行道となつてしまいます。

私は見るに見かねて、立つて老女に席を譲り、他の車に座をさがして坐りました。私はつくづく「牀坐施をなせよ」との聖訓が耳もとでささやかれているように感じました。私どものように旅ばかりする者は時にじつと立つていなければならぬ時があります。時々むこうから「ここへおかけ下さい」と坐をすすめられる時何とも云えない有り難さを感じます。その方の持つお徳に合掌したくなります。汽車はもちろんのこと、汽船、自動車、電車、其の他大衆の集まる会合の席において席を頒ち譲ることは尊いことでもあります。その心がもつと広げられると、色々な美しい世界が開けてきましよう。

人生と坐る座席については、何かしら深く考えて見なければならぬものがあるようであります。兎も角、坐を布施せよとの教えは、意味深いことだと思ひます。

## 房舎施

第七は房舎施ぼうしゃせであります。

これは宿るべき房舎いせを施すことであります。一夜の宿を布施することです。印度では四姓の差別がひどくて、人柄が違えば座席も共にせず、宿舎も一つにしません。日本でも昔は、庄屋と百姓は同間どうませぬと威張つたものであります。封建的なこうした空気は今もまだ残っています。

社会組織や、人間生活の約束が、容易に知らぬ人にでも一夜の宿を貸すことを好みません。しかし宿るに家のない人に、家を布施するということは社会問題としても考えらるべきことであります。先日山陰の井野村では、礼一口言つたことのない盲の清さんのために組内の人たちが、家をたててやつた美しい話を聞きましたが、貧しい

人たちの間では、一室半畳をも布施しあつて生きているのを見ることであります。私どもはこの心をおしすすめて生きさせて頂きたいものであります。

以上は財を要しない布施であります。布施など出来ないと言つてゐる間に、私にでも出来る多くの善を行わないで、私自身の存在を無意味にしています。

私どもは、南無阿彌陀仏の大行に生くべきであります、南無阿彌陀仏は一切の善や徳の母体であり、果であります。布施行も所詮は六字にのみ円具せられてゐることであります。やさしい顔も、慈悲に輝く眼も、尊い言葉にも、報謝の身施も、心施も全ては、不知不識の間に信仰生活の裏に成就することでありあります。

我等は布施を語る前に如来の智慧と慈悲を頂くべきであります。